ストーンヘンジ全景。現在は遺跡内部には入れず、周囲の歩道から見学するようになっている。今回は特別に許可を得て内部に入れてもらった。

巨石文化と青銅

ブックデザイナー　山田 英春

遺跡に残る短剣と斧の彫り物（今世紀初頭の写真）。現在はより摩耗が進んでわかりにくくなっている。

生業の本の装丁とは殆ど何の関係もないけれど、イギリス各地に残る巨石遺構の写真を撮り歩いている。

昨夏もイングランド西部からウェールズを巡る旅に出かけた。最初に訪れたのはソールズベリー平原に残るストーンヘンジだ。ブリテン島では紀元前三五〇〇年頃から二五〇〇年頃、新石器時代から初期青銅器時代にかけて、巨大な岩を円形や直線状に立てて並べたり、組み上げたりということが盛んに行われた。その数は実に数千におよぶ。ストーンヘンジはそうした巨石遺跡の中でも最大級で、他とは一線を画す高い技術を用いて作られている、いわば、「巨石文化」の集大成のようなモニュメントだ。遺跡の内部に入り、そびえ立つ岩を間近に見上げた。大きい。圧倒的な量感だ。重さ五〇トンの岩を切り出して運ぶのに、六百人で一年はかかったとも推測されている。そんな巨石を数十も、表面を加工し、立て、上に水平に岩を乗せ、それらをほぞ穴でしっかり噛み合わせてある。気の遠くなるような作業だったに違いない。

岩のひとつには短剣と斧の形の彫り物がある。ストーンヘンジが完成したころに彫られた、青銅の剣と斧を実物大に描いたものだと言われている。

石器時代から続いていた「巨石文化」をブリテン島全土に広め、開花させたのは青銅器を使う民の登場だった。この金属との出会いと普及が、狩猟・農耕の技術を格段に進化させ、遠隔地との盛んな交易を促し、数百人が恒常的に遺跡の建設に関わるような組織化された社会を実現したという。この銅剣の彫り物には「自分たちは銅を使う民であり、自分たちだからこそ、これだけのものが作れたのだ」という非常に強い主張が込められているようにも感じられる。

夏至の日の日の出の位置とストーンヘンジの円の中心を結ぶライン上に、遺跡に入る通路と入り口が造られているため、夏至の日に何らかの儀式が行われていたと考えられる。

ブリテン島には銅の産地が数多くあるが、銅山の中には青銅器時代の始まりと同じくらい古い歴史をもつものがある。そのうちの一つ、ウェールズ北方のGreat Orme Mineを訪れた。現在は見学用施設となっている。坑道は狭く複雑にカーブしていて降りていくとさながら大きな蟻塚に迷い込んだかのような気分だ。石器時代の手掘りの坑道が多く残っていて、石器と鹿の角などの非常に限られた道具でよくもこれだけの規模の採掘が行われたものだと感心することしきりだ。いかに銅が特別な資源であり、それだけの労力を注ぐに見合う価値をもっていたかがよくわかる。おそらく採掘中に崩落などの事故も多発したことだろう。ひょっとすると未だに埋まったままの遺骨などもあるかもしれない。細かく枝分かれした坑道の先の暗闇を見つめながらそんな想像をしていると、涼しい坑道内がさらにひんやりとしてくる……。

ストーンヘンジに最初に設置された数十の岩は三八〇キロも離れたウェールズの山の上からはるば

複数の立石の上に水平に岩を乗せた「ドルメン」もブリテン島各地にみられる。
多くは墳墓の石室の名残だ。

スコットランド北方のオークニー諸島に残る非常に大きな岩を使ったサークル、
Stones of Stenness。

（左）Great Orme Mine の坑道。人ひとりやっと通れる狭さ。岩の中の緑がかった部分は銅を多く含む鉱物、孔雀石。

（右）Great Orme Mine全景。中央右寄りに見える灰色の丸い石は青銅器時代に採掘に使われた石器。この鉱山は青銅器時代のものとしては世界最大だ。

る運ばれて来た。なぜそんなに遠くから巨石を運んだのか、大きな謎のひとつだ。最近の発掘では、当時の支配階級のものとみられる人骨がウェールズ育ちだと鑑定されたという。もしかすると「青銅の民」はウェールズから、ウェールズの銅とともにやって来たのかもしれない。ウェールズの山から岩を運んだのも、その山が彼らにとっていわば聖山で、そこの岩には特別な力があると考えられていたからかもしれない。Great Orme Mineの銅も、ストーンヘンジを作った人々によって掘られたかもしれない――と、こんなふうにさまざまに想像するのも楽しい。

「巨石文化」はストーンヘンジの完成をみる紀元前一五〇〇年ころを境にして以後衰退の一途をたどる。はっきりした原因は不明だが、私は石の文化を花開かせた青銅が、結果的に石の文化を葬ることになったのではないかと思う。青銅器を手にする前、石は斧に、鏃（やじり）に、ナイフに、装飾品に、家屋の部材にと生活のあらゆる場面で使われ、石の重要性、優位性は際立っていた。ストーンヘンジの用途には諸説があるが、いずれにしても石を尊重し、巨石には特別な力が宿るとする心なくして、あれほどの施設はつくりえなかったにちがいない。彼らが感じていたそうした「石の力」が、青銅器という新たな、格段に洗練された道具の普及と一般化によって次第に弱まっていったということは想像に難くない。青銅器から鉄器へ、さらには放射性物質まで、人間は、地中から掘り出した鉱物資源を消費しながら現在に至っている。巨石に刻まれた銅剣の彫刻は文明史の重要な転換点を示したものともいえそうだ。

巨石群は長い間うち捨てられたままだったが、微弱ながら「石の力」を残してきた。前世紀初頭まで、子宝に恵まれない女性が深夜に裸で岩を抱く、耳を押し当てて岩が囁く予言を聞くというような風習が残っていた。岩は生きていて夜中に散歩にでかけるというような伝説も各地に残っている。キリスト教会は巨石遺跡は悪魔の所業とし、岩を土に埋めるなどした。

現在も私のような物好きを世界中から引きつけているのだから「石の力」は健在といえるだろう。ストーンヘンジを訪れる人は年間数十万人にのぼり、増え続けている。現代人に作用する「石の力」は様々だ。古代人は我々の知らない超自然的パワーを用いたのではないかと、真剣に考えている人たちもいる。確かに、この建造物は常識的な解釈を拒絶するような、不可解さ、理不尽さをもって存在しているが、私はどこか積み木で遊ぶ子供の無邪気な戯れを見るような感覚を覚える。数千年という齢を重ねた人間の文明の、ごく幼少期、並べて立てた積み木の上にもう一つ横向きに載せることを覚えて喜んでいる子供の姿が見えるような気もするのだ。

ブックデザイナー
山田 英春
やまだ　ひでは

1962年東京生まれ。国際基督教大学教養学部社会科学課卒業。出版社勤務、デザイン事務所勤務を経て独立。
現在書籍のレイアウト・装丁を専門にしている。
イギリス、アイルランドに残る巨石遺構、ケルト人の残した石碑、中米のマヤ、アステカ文明の遺跡などの「石の遺跡」写真を撮り歩き、Webで公開している。
http://www.lithos-graphics.com